

KANSAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

THE 44TH
SUBSCRIPTION CONCERT



関西シティフィルハーモニー交響楽団
第44回定期演奏会 | 2007年9月24日[月・祝]14:30
ザ・シンフォニーホール

主催—関西シティフィルハーモニー交響楽団
協賛—株式会社 ASK PLANNING CENTER

関西シティフィルハーモニー交響楽団

第44回定期演奏会



2007年3月18日、ザ・シンフォニーホール、第43回定期演奏会

関西シティフィルハーモニー交響楽団

KANSAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA
(社)日本アマチュアオーケストラ連盟加盟団体／大阪文化団体連合会会員団体

1974年各大学オーケストラの卒業生を主たるメンバーとして、関西OB交響楽団の名称で結成。1994年創団20周年を機に現在の団名に改称。“アマチュア精神に基づく、グレードの高い社会人オーケストラ”をモットーに、年間2回の定期演奏会をはじめファミリーコンサート等を、意欲的に開催しています。近年は指導体制の充実に力点を置き、有能なプロの先生方を指揮者や指導スタッフに招請して研鑽を積んで参りました。中でも、1998年より4年間、ズラタン・スルジッチ氏(現ドゥブロヴニク交響楽団首席指揮者)を常任指揮者に招聘し、その指導を仰いだことにより「音楽的に大きな飛躍を遂げた」との評価を内

外から得ております。また組織としても「若い力」を積極的に運営面に活かし、“常に成長するオーケストラ”を目指して努力を重ねております。2004年8月に大阪府で開催された「全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会」では、開催主管団体として、当団の組織力を遺憾なく発揮し、フェスティバル成功の原動力として、連盟をはじめ全国のアマチュアオーケストラ各位から、高い評価と大きな賛辞を頂くことができました。毎週土曜日の夜、指揮者やトレーナーの先生方の指導のもと、真剣な練習を行っており、現在団員数は、約100名を有します。

ごあいさつ



阿保 幸雄 Sachio Abo
関西シティフィルハーモニー交響楽団 団長

本日は、私共の第44回定期演奏会によるごお越し下さいました。

今日のコンサートでは、一曲目にワーグナーのタンホイザー序曲を演奏いたします。この曲は当交響楽団が1984年に一度演奏いたしました。残念ながら満足できる演奏とはなりません。それ以来再度挑戦したいと願いながらも、高・中弦族から「こんな難しい曲は無理」と演奏を拒否され続けて来ました。あれから二十余年、この曲を再び演奏出来るという事で、感無量です。今度こそ、鑑賞に堪える演奏をしたいと願っています。

二曲目のラフマニノフのピアノコンツェルトのソロをして下さる鈴木謙一郎氏は、若くして多くの有名コンクールにて非常に優秀な成績をあげられ、その後も国内は勿論の事、国際的にも第一級の活躍をしておられます。本日はこの華麗で非常にロマンチックな名曲の演奏を通じて、私共の音楽をより一層の高みに導いて下さるものと大いに期待しております。

三曲目に演奏いたしますシューベルトの「ザ・グレート」は、実は前団長の松田氏が1977年に当団に入団されて以来三十年間、彼が是非演奏したいと願いながら何故か今回の演奏会まで、不思議な事に一度も演奏されなかった曲なのです。当団発展の随一の功労者であられる氏が、今回の演奏会をもって退団されるにあたり、団員の総意でこの曲を「送別の曲」として演奏する事となりました。団員一同、ひとしお思いのこもった演奏になるに違いありません。

末筆となりましたが、前回の第43回定期演奏会の際、当団のチケット発売状況の把握の甘さと、発券システムの不備により、ご来場下さった多くのお客様に対し大変なご迷惑をお掛けする事態がございましたこと、衷心よりお詫び申し上げるとともに、聴衆の皆様方には今後とも当団に対し、温かいご支援とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

指揮—ギオルギ・バブアゼ

管弦楽—関西シティフィルハーモニー交響楽団

ワーグナー

歌劇「タンホイザー」序曲

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲第2番

1. Moderato
2. Adagio sostenuto
3. Allegro scherzando

独奏ピアノ—鈴木謙一郎

シューベルト

交響曲第8番(旧9番)「ザ・グレート」

1. Andante / Allegro ma non troppo
2. Andante con moto
3. Scherzo ; Allegro vivace
4. Allegro vivace

楽譜協力：トヨタミュージックライブラリー

ギオルギ・バブアゼ

指揮

関西シティフィルハーモニー交響楽団常任指揮者

1962年グルジア共和国トビリシ生まれ。トビリシ国立音楽院にてシウカシュヴィリ教授にヴァイオリンを、オディセイ・ディミトリアディ氏に指揮を学ぶ。モスクワにてボロディン弦楽四重奏団のベルリンスキー氏に師事。1986年より5年間パトゥーミ市交響楽団の指揮を務める。1990年よりグルジア音楽協会室内管弦楽団の芸術監督および首席指揮者を務め、フランス、ドイツへ演奏旅行。その他、国内外におけるオーケストラのヴァイオリン奏者としてイタリア諸都市で演奏する傍ら、グルジア弦楽四重奏団のメンバーとしても活躍。1996年より大阪シンフォニカー交響楽団のコンサートマスター、2001年10月より関西フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに就任。2002年4月より京都市立芸術大学ヴァイオリン専攻非常勤講師も務める。トビリシ弦楽四重奏団メンバー。2005年より、関西シティフィルハーモニー交響楽団常任指揮者就任。

ワーグナー 歌劇「タンホイザー」序曲

1813年、ドイツのライプツヒヒに生まれたワーグナーは、親交があった作曲家のウェーバー（代表作は魔弾の射手など）から強い影響を受けました。ウェーバーは若きワーグナーにとって憧れの人で生涯敬意を払った数少ない人物であったようです。彼は15歳のころベートーヴェンに感動し音楽家を志し同時に劇作にも関心を持ち、これが後の彼独自の芸術を生み出す原動力となりました。1842年にドイツ、ドレスデンで歌劇「最後の護民官リエンツィ」、「さまよえるオランダ人」を上演して注目され、翌年ザクセン王国宮廷劇場指揮者に任命されました。1845年には「タンホイザー」、1848年には「ローエングリン」を作曲し好評を博しました。1849年にドレスデンで起こったドイツ三月革命の革命運動に参加、運動が失敗したため全国で指名手配されリストを頼りスイスへ逃れ数年間を過ごしています。その後、数多くの作品を残しながら1883年2月13日にヴェネツィアへの旅行中に死亡しました。作品でも私生活でも女性による救済を求め続けたワーグナーの最後の論文は「人間における女性的なるものについて」であり、その執筆中に以前から患っていた心臓発作が起きての死でした

本日序曲を演奏する歌劇「タンホイザー」は、中世ドイツの

ミンネゼンガー（貴族出身の詩人・音楽家）の一人であるタンホイザーの物語です。ワルトブルクの領主の姪であるエリザベートと清い愛情を交わしながらも官能の愛を求め妖艶なヴェーヌスに魅了されたタンホイザーは、快楽に満ちた生活にも飽きて再びワルトブルクに帰って来ます。彼はローマ法王のもとへ罪の許しを乞う旅に出ますが許しは得られず、失意の念に閉ざされて再び妖艶なヴェーヌスベルクにあこがれます。しかし友人であるヴォルフラムによりエリザベートへの思いをよみがえらせたタンホイザーですが、タンホイザーの罪が許されなかったことを知ったエリザベートは自ら命を犠牲として免罪を求めます。タンホイザーは彼女の遺体にすがるようにして息を引き取ると、杖に芽が出るという奇跡が起こりタンホイザーの罪は許されるのでした。

今を去ること40数年前の中学生のころ、練習の帰りにトロンボーンを抱えて歩いていた時に見知らぬおじさんから「昨日のN響のタンホイザー聴きましたか!?!? よかったですね〜〜!!」と声を掛けられたのがこの曲を知った最初でした。今日もこんな感想を持って頂ける演奏ができればと思っています。

柏岡 亨(トロンボーン)

ラフマニノフ ピアノ協奏曲第2番

偉大なピアニストでもあったセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、その生涯にピアノと管弦楽のための作品を5曲残した（ピアノ協奏曲4曲、パガニーニの主題による狂詩曲）。中でもこのピアノ協奏曲第2番は、彼の代表作であるのみならず、古今東西のピアノ協奏曲の中で最も人気のある作品の1つとなっているが、特に昨年はこの作品を耳にする機会が一段と増したように思われる。トリノ・オリンピックでは、フィギュアスケートの日本代表・村主章枝と高橋大輔が共にフリー・プログラムでこの曲を使用し、見事入賞。ドラマ化された人気漫画「のだめカンタービレ」の中にも、「オレ様」と胡散臭い指揮者が熱演を繰り広げる作中屈指の名場面(?)があり、主人公・のだめにとっても転機を迎える重要な役割を果たす1曲となっている。

しかし、この作品の誕生の前には大きな挫折が横たわっている。1897年、ラフマニノフは交響曲第1番を発表するが、その初演が酷評されて作曲家としての自信を喪失し、極度の神経衰弱に陥ってしまう。そんな彼を救ったのが精神科医、ニコライ・ダール博士であった。博士はラフマニノフに「あなたは素晴らしいピアノ協奏曲を作る」という暗示療法を行なって自信を回復させたという。にわかには信じがたい話だが、1901年、ラフマニノフは本当に素晴らしいこの名曲を作ってしまう。初演はラフマニノフ自身がピアノを弾いて大成功を収め、曲は恩人・ダール博士に献呈されている。

第1楽章 Moderato (ハ短調)

この作品の最も印象的な冒頭は、ピアノのノスタルジックな和音連打で始まる。静寂の中からかすかに聞こえてくるその音は、ラフマニノフが幼少から耳なじんでいたであろうロシア正教会の鐘を思わせる。その響きが徐々に大きくなるにつれ、曲と聴き手の距離も近づき、オーケストラがユニゾンで音を重ねる瞬間はまるで20世紀初頭のロシアの世界へ引き込んでいくかのようなのである。挫折から復活を遂げたラフマニノフの人生が凝縮された、壮大なドラマの始まりを告げる音であるかもしれない。

第2楽章 Adagio sostenuto (ホ長調)

ピアノのアルペジオ（分散和音）に導かれて現れるフルートとクラリネットの美しい主題が、やがてピアノへ、そしてオーケストラ全体に静かに広がってゆく。

第3楽章 Allegro scherzando (ハ短調～ハ長調)

蛇足ながら、この作品を献呈されたダール博士はアマチュアのヴィオリストでもあり、後年この作品の演奏に参加したこともあるという。ラフマニノフがこのことを意識したとは思えないがこの作品にはヴィオラが活躍する箇所が多く、この楽章の第2主題もヴィオラによって導かれる。高らかに第2主題を歌い上げるオーケストラとピアノが互いを讃えるように、曲は力強く閉じられる。

太田真紀子・田中景子(ヴィオラ)

シューベルト 交響曲第8番(旧9番)「ザ・グレート」

31歳で夭逝したシューベルトですが、この曲は作曲者の死から約20年後にロベルト・シューマンによって発見されました。そのシューマンがこの曲を「天国的に長い」と評したことは広く知られていますが、まさにいつ終わるとも知れぬ長大な交響曲です。《グレート》との標題が冠されたのもむべなるかな。作曲時期はベートーヴェンの交響曲第9番《合唱付き》の翌年ですが、シューマンはこの曲がすでにベートーヴェンの先を行く「ロマン性」を持つことを指摘しています。ちなみに初演の指揮者はメンデルスゾーンです。

シューベルトの交響曲は彼の生前に公開演奏されることはなく、有名な《未完成》交響曲もシューベルトの死後に発見されたものでした。シューベルトの交響曲がロマン派の時代になって発見され、その「ロマン性」が評価されたということがポイントです。

ベートーヴェンの交響曲の後継としての《グレート》

しかしシューベルト自身がロマン派としてあたらしい表現をしてやろうなどと考えて作曲したとは思えません。《グレート》では、シューベルトがベートーヴェンの交響曲に続かんとて、ベートーヴェンを大いに意識した形跡がまずうかがるからです。

ベートーヴェンは交響曲において、主題を分解して組み換えるという構築的な手法を確立しました。リズム的にシンプルな主題を展開させることで、音楽は論理的で有無をいわせぬ説得力をもちます。例の「ジャジャジャジャー」だけで1曲こしらえてしまった、第5交響曲《運命》の第1楽章が例としてわかりやすいと思います。

《グレート》でもまず印象に残るのはリズムです。たとえば第1楽章の第1主題は付点(ターンタ・ターンタ)と3連符(タタタ・タタタ)を2小節ずつ交互に繰り返すという、非常にシンプルなものです。付点のリズムは第4楽章でも一貫して用いられており、全体に統一感を与えています。第4楽章ではこの付点のリズムと3連符のリズムが交互に現れたり重ねられたりされ、ベートーヴェンのような構築的な手法が展開されています。

《グレート》は冗長なのか

《グレート》は以上のようにリズムを重視して構築的に作曲されました。しかしこの曲はベートーヴェンの音楽がもつ、ガツンとくるような迫力に欠けるという感想をお持ちの方も多いかも知れません。リズムを重視した構成からくる理屈っぽさはもちながら、それがどうも説得力に結びついていないような。多くの人がこの曲からうける印象は「何かしら悠長だなあ」という感じだと思います。シューマンによる「天

国的に長い」という評があればほど有名になったのも、この曲を一聴した印象にじっくりくるからに他ありません。これをどのように評価するかが重要です。

シューベルトの「ロマン性」

結論から述べますと、《グレート》を楽しむポイントはまさにこの「悠長さ」に身を浸してしまうことです。ここに流れるのは悠久の時の流れであり、せせこましい時間の感覚はありません。日頃の生活で感じる感情の浮き沈みのようなものからは超越しているのです。

《魔王》や歌曲集《冬の旅》で知られるように、シューベルトは歌曲において本領を発揮した作曲家でした。つまりシューベルトはもともと「うたごころ」あふれる作曲家なのであり、そのシューベルトが《グレート》ではあえてリズム重視の主題を用いたのです。シューベルトはベートーヴェンのように簡潔明瞭に音楽をまとめ上げることはできませんでしたが、シンプルなリズムで構成された音楽にシューベルトの「うたごころ」は息の長い幅をもたらしました。その音楽は規則正しく配列されたリズムの上にただよいながら進行し、長い年月を生き延びた古典建築の中で、悠久の時の流れに思いをはせるかのような感覚をいだかせます。

シューベルトの「うたごころ」によって拡張された交響曲の形式こそがシューマンの評価した「ロマン性」に他ありません。ここからブルックナーの偉大な交響曲群まであと一歩です。

《グレート》の悠久の時間を楽しめるようになったら、もうあなたはこの曲のとりこです。本日の私たちの演奏で、そのような方が一人でも増えることがあればうれしいかぎりです。

第1楽章 ホルンによるおおらかで印象的な序奏で幕を開けます。主部ではリズムカルなメロディーが特徴的です。

第2楽章 シューベルトの「うたごころ」満載の珠玉の音楽です。しかしこの主題でも付点のリズムが配されていることにご注目ください。音楽自体も決して感傷的に過ぎるようなことはなく、ストイックな構えを崩すことはありません。

第3楽章 躍動感あふれるスケルツォ。この楽章は何と言っても中間部です。弦楽器の刻むリズムの上に管楽器がゆうゆうとメロディーを奏でます。このゆったり感こそが《グレート》の醍醐味です。

第4楽章 活気に満ちた終楽章は、しょっぱなの第1主題からして付点と3連符の対比です。以下、ひたすら付点と3連符が連なったり重なったりしながら疾走します。

中川雅登(ヴァイオリン)



鈴木 謙一郎 ピアノ独奏

大阪・箕面市生まれ。4歳よりピアノを始め、桐朋女子高等学校音楽科(共学)入学。第42回全日本学生音楽コンクール高校の部全国第1位。'91年第60回日本音楽コンクール第1位、併せて井口賞、野村賞、河合賞受賞。桐朋学園大学音楽学部ピアノ科を首席で卒業。同大学研究科入学。'98年文化庁海外派遣研修生として渡仏。フランス・トゥールーズ音楽院入学。1等賞卒業。プレストピアノコンクール第1位受賞。'03年ホロウィッツ国際音楽コンクール第4位入賞、銅メダル。この間、日本、ヨーロッパ各地で数多くリサイタルやオーケストラとの協演を行っている。殊に、数年を過ごしたウクライナでは、30回を超えるコンサートツアーにて、ソロリサイタルや、コンチェルトを演奏。各地で熱狂的に受け入れられた。日本では、大阪いすみホール、東京イノホールを始め、全国各地でリサイタル、コンチェルトを演奏。NHK-TV・FM等にも出演。限界を感じさせないスケールの大きさと、メランコリックな繊細さを併せ持つ音楽性は、聴くものを別世界へと誘うエネルギーを持っている。これまでに、土田晴子、田中希代子、林秀光、テレーズ・デュソ、ヴァレリー・コスロフの各氏に師事。'05年、'06年箕面メイプルホールにて帰国リサイタルを行う。NHK-FM「名曲リサイタル」にも出演、好評を博す。'06年には、大阪フェニックスホール、東京オペラシティ・リサイタルホール等、各地のコンサートに出演。'07年、神戸国際会議場にて、イタリアのピアノで、コンサートグランドとして世界最長308cmの大きさを持つ「ファツィオリ」を演奏。各方面から注目を浴びる。また、京都国立近代美術館では、「ディアギレフのロシアバレエと舞台芸術」のテーマのもと、チャイコフスキー「眠りの森の美女」、プロコフィエフ「ロメオとジュリエット」等を演奏。'08年には、ラフマニノフを録音したCDを発売予定。今後いっそうの活躍が期待され、注目されている。また、演奏の傍ら、愛知県立芸術大学にて後進の指導にもあたっている。

関西シティフィルハーモニー交響楽団

常任指揮者—ギオルギ・バブアゼ

■VIOLIN

- ◎西 田 美音子
 稲 谷 亜季子
 稲 葉 宏 己
 岡 崎 雅 樹代
 岡 崎 慶 太
 ◎小野寺 藤 孝 司
 ◎加藤 藤 裕 紀
 加川 盛 晶 子
 河神 北 田 村 上 子
 坂 佐 島 元 向 子
 坂 島 津 子
 豊 中 谷 登 夫
 中 難 西 谷 道 干
 橋 花 村 悠 敏
 平 藤 花 本 村 下 子
 宮 宇 地 田 和 裕
 森 山 本 真 弓

■VIOLA

- 井 戸 義 訓
 入 江 田 隆
 太 川 真 紀
 岡 川 端 成 子
 高 川 中 景 千 彬
 ◎田 中 景 子
 ◎坂 中 東 佑 二 郎
 福 松 本 文 治
 木 内 本 智 世
 森 野 出 涼 子
 永 田 佳 哲 子
 (客演) (客演) (客演) (賛助)

■VIOLINCELLO

- ◎安 彦 郁
 阿 保 幸 雄
 岩 上 田 倫 和
 奥 野 田 真 紀
 小 野 元 平 人
 坂 豊 島 素 大
 富 樫 本 正 三
 橋 廣 樫 誠 代
 廣 瀨 美 子
 藤 井 綾

■DOUBLE BASS

- 安 彦 義 哉
 稲 葉 杏 子
 隅 谷 正 一
 長 岡 尾 善 正
 秋 近 尾 昭 正
 ◎安 渡 岡 田 一 子
 (客演)

■FLUTE

- 姜 愛 順
 ◎芝 野 均
 宗 吉 希 子
 川 端 裕 美 (賛助)

■OBOE

- ◎岡 田 啓
 勝 山 貴 美 子
 酒 井 洋 市
 西 山 健 一
 波 留 ひとみ

■CLARINET

- 打 田 正 樹
 栗 山 明 子
 ◎細 野 範 巖
 山 中 聡 子

■FAGOTT

- ◎一ノ瀬 圭 子
 竹 内 郁 夫
 山 科 みどり

■HORN

- 安 彦 高 志
 織 克 洋
 酒 井 星 子
 西 山 順 子
 廣 橋 麻 理
 ◎山 橋 幸 生
 山 部 幸 義

■TRUMPET

- 残 熊 祐 治
 西 川 倫 史
 ◎廣 橋 誠 司
 山 田 浩 二

■TROMBONE

- 柏 岡 亨
 ◎金 昌 信
 正 岡 千 明
 松 田 齊

■TUBA

- 藤 川 健

■PERCUSSION

- 橋 淳 士
 ◎田 村 春 子
 吉 田 恭 子
 橋 本 邦 子 (客演)

■団長

- 阿 保 幸 雄
 ◎副団長
 柏 岡 亨
 ◎運営委員長
 山 科 幸 生
 ◎チーフパートナー
 廣 橋 誠 司
 (兼インスペクター)
 ◎インスペクター
 小野寺 慶 太
 ◎総務
 岡 雅 樹
 織 田 克 洋
 坂 元 正 三
 富 樫 川 倫 義
 西 山 部 幸 生
 ◎会計
 田 村 千 春
 ◎人事
 山 本 真 弓
 ◎IT
 岩 田 倫 和
 ◎ライブラリアン
 井 戸 義 訓
 ◎渉外
 森 修 二
 ◎楽器
 橋 淳 士
 ◎団費
 勝 山 貴 美 子
 ◎友の会
 山 科 みどり
 ◎会計監査
 長 岡 豊
 ◎相談役
 松 田 齊

◎トレーナー

- 池 田 重 一
 岩 井 英 樹
 高 昌 昌 帥
 谷 野 里 香
 中 橋 三 好
 谷 本 口 哲
 葉 真 哲
 子 弘 也
 郎

◎…コンサートミストレス
 コンサートマスター

◎…パートナー

松田前団長へ

昭和52年5月23日 郵便貯金会館ホール 関西OB交響楽団「ピアノ協奏曲のためのコンサート」、松田さんが当オーケストラに出演された初めての演奏会です。その後の昭和52年11月13日の第3回定期演奏会より現在まで、オーケストラの中心的役割を果たされてこられました。運営委員、総務委員、運営委員長、団長と旧名称の関西OB交響楽団時代から現在の関西シティフィルまで、このオーケストラの「今」を築かれたといっても過言ではないと思います。現在は無くなりましたが、扇町公園プールの客席の下にあった当時の大フィルの練習場をお借りしてスタートした関西OB交響楽団が、諸般の事情で大東市や大阪市内に練習会場を幾度となく変更する事を余儀なくされ、練習場の不安定さなどに起因する団員の減少や財政的な問題など、何度かあった存続の危機を乗り越えられたのは、松田さんの持ち前の指導力と行動力、判断力に拠るところが大きかったと思います。

平成16年には日本アマチュアオーケストラ連盟主催の「全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会」の実行委員長として、全国から集まったオーケストラ仲間600余名との「音楽三昧の3日間」のイベントを大成功に導かれました。それも太田府知事のピアノコンチェルトをオープニングに。

初めて松田さんに会ったのは第7回定期演奏会(昭和56年11月22日)の練習を始めた8月ごろだったと思います。それ以来26年間、同じパートとしてほぼすべての演奏会に一緒させて頂きました。入団した当時のトロンボーンは幽霊団員も含めて5名、実質3名と言う状態でした。その後幾人かの方が入退団され一時は松田さんと2人だけになり、演奏会のたびにエキストラをお願いした数年間も有りましたが、最近10年は金さんと3人で不動のパートと称してきました。

入団当時松田さんは戦後すぐに日本に入ってきた珍しい楽器を所有されており、そんな楽器談義や学生の頃に進駐軍のダンスパーティーのバンドで演奏した話、もちろん音楽談義など練習の帰りの寄り道も楽しい思い出です。また松田さんのご自宅でもアンサンブルを楽しませて頂きましたし、そこへワルシャワ国立歌劇場管弦楽団トロンボーン奏者の山上さんがこられたこともありました。

松田さんが運営委員長から団長になられた時、後を引き継いで運営委員長を約8年間させて頂きました。ちょうどヨタ・コミュニティコンサートによるオペラの演奏会を始めた頃で、松田さん、現団長の阿保さん、現運営委員長の山科さん、チーフパトリリーダーの広橋さんなどと曜日を問わず夜中まで喧々諤々議論を重ねましたが、いつも松田さんの音楽やオーケストラに対する熱意には頭が下がる思いでした。その後もオランダのオーケストラとのジョイントコンサートや毎年池田アゼリアホールで開催させて頂くようになったファミリーコンサート(いけだ文化市民振興財団共催)などでも、松田さんはオーケストラのために常に熱い思いで行動されました。

松田さんのこのオーケストラに対する熱い思いは、これからも団員一同の思いとして受け継いでいきたいと思っています。

シティフィルの活動には終止符を打たれますが、まだまだプレーヤーとしては現役を続けられると聞いています。これからもお体に気をつけられて音楽生活を楽しみ、シティフィルを応援して下さるようお願いいたします。長い間ご苦労様でした。ありがとうございました。

柏岡 亨(トロンボーン)

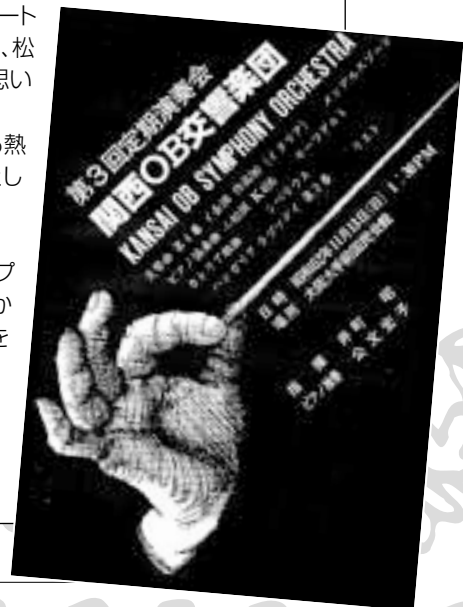


心から感謝をこめて

関西OB交響楽団
ピアノ協奏曲のためのコンサート



昭和52年5月23日(日) PM 6:00
郵便貯金会館ホール



松田前団長が昭和52年初めて出演された公演のプログラム。

関西シティフィルハーモニー交響楽団 | 第6回ファミリーコンサート

2008年 1 | 20 日

午後3時開演予定
池田市民文化会館 アゼリアホール

指揮—ズラタン・スルジッチ
独唱—エリザベート：榎水枝（ソプラノ）
ヴェーヌス：上阪万里子（メゾ・ソプラノ）
タンホイザー：角地正範（テノール）
ヴォルフラム：油井宏隆（バリトン）
合唱—関西シティフィルハーモニー合唱団

ワーグナー：歌劇「タンホイザー」ハイライト
チャイコフスキー：交響曲第4番

関西シティフィルハーモニー交響楽団 | 第45回定期演奏会

2008年 5 | 10 土

午後7時開演
ザ・シンフォニーホール

指揮—ギオルギ・バブアゼ [予定]

モーツァルト：歌劇「魔笛」序曲
サン＝サーンス：交響曲第3番「オルガン付き」
高昌帥：曲名未定（関西シティフィルハーモニー交響楽団委嘱作品）
当団トレーナーでもある作曲家、高昌帥への委嘱作品。
この定期演奏会が初演となります。

団員募集の
お知らせ

● ヴィオラ
● ファゴット

急募

練習日時 毎週土曜日 夜6:30～9:30
練習場所 北出音楽事務所 (JR・京阪「京橋駅」から徒歩10分)
お問い合わせは事務局まで [06-6136-1737]
◎事務局が変わりました。ご注意ください◎
なお、当団のホームページでも最新の団員募集情報を公開しております。

関西シティフィルハーモニー交響楽団
友の会

会員募集のお知らせ

当団では「友の会」の会員を募集致しております。会員になられますと ■当団主催演奏会のご案内 ■特別優待価格でのご案内 ■友の会特別席のご用意 等の特典があります。入会金、会費無料!!

友の会会員 お申し込み方法

*はがきでの演奏会のご案内をご希望の方……パンフレットに折込の申し込み用紙にてお申し込みください。お問い合わせは事務局までお気軽にどうぞ [事務局 06-6136-1737 ◎事務局が変わりました。ご注意ください◎]

*メールでの演奏会のご案内をご希望の方……只今、メールでの演奏会のご案内およびインターネット上でチケットのお申し込みができるよう準備中です。詳細は当団ホームページをご覧ください。折込の申し込み用紙ではお申し込みできませんので、ご注意ください。

・友の会のみなさまの個人情報、演奏会のご案内など、当団の諸活動に關係する用途以外には、一切利用致しません。

関西シティフィルハーモニー交響楽団ホームページ

<http://kcpo.jp>

(2007年2月にアドレスを変更致しました)